

第3回世界合唱博覧会 3年ぶりのリスボン 江川善裕

IFCM 理事
元全日本合唱連盟事務局次長

歓迎 Ceremony (サン・ジュリアン・ダ・バーラの要塞)

『おんがく広場』クッキー会編集委員江川善裕さんが参加した、第3回世界合唱博覧会の報告をまとめました。

国際合唱連合(IFCM)の理事会・総会、そして第3回世界合唱博覧会(World Choral EXPO)に出席するため、3年ぶりとなる海外、ポルトガルのリスボンに行ってきました。以下のとおり時系列で報告いたします。

2022年9月1日(木) 22:30 成田出発

前回と同じく、夜遅く成田からの出発便でした。これだと現地には昼間に着くので、不安が少ないのです。それでも、コロナ禍の影響でチェックインが出発の3時間前になっていました。以前は90分前で十分だったので、倍の時間になります。

フライトはエミレーツ航空でドバイを経由してリスボンへ。フライト時間は片道10時間40分+8時間10分とかなりの時間を要しますが、エミレーツは世界でも評価が高い航空会社のひとつなので快適でした。映画も数本観ることができます。

9月2日(金) 12:35 リスボン到着

リスボン空港に無事に到着しました。ホテルへは大きなスーツケースを抱えているので手っ取り早くタクシーで。ヨーロッパは「Uber Taxi」が利用できるので、円安とはいえ、料金は格安です。ホテルに着いてからは日が高いので近所を散策。スーパーの位置を確認し、ついでにカフェテリアで夕食。もちろんスーパーで水やビールを購入しました。リスボンは坂道が多いことで有名ですが、ホテルから商店街までの最も近い道がとても急勾配の上り坂で息切れ状態になりました。

IFCMの会議に出席

9月3日(土) 9:00

到着2日目の朝9時から早速会議がIFCM本部で始まりました。まずは執行委員会、続いて午後3時から理事会が開かれました。これまでずっとリモート会議で理事会を開いていたので、今回初対面の理事の方々もいらっやいました。

19:00

この日の夕方は、歓迎セレモニーとコンサートがリスボンの観光スポットの一つ「サン・ジュリアン・ダ・バーラの要塞」で開かれました。セレモニー会場は大西洋を臨む戸外で、コンサート会場は石造りの倉庫のような大きな部屋でした。

コンサートに登場したのが、地元の女声ヴォーカルアンサンブルで、結構な地声というか胸声と歌い回しだったので力強いという印象。セレモニー会場では誰もマスクはしていませんでしたが、さすがに、コンサートではマスクをする人が増えました。

(注：マスク着用が必須だったのは飛行機の中と経由地の空港だけ。タクシーもマスク着用が推奨されてたようですが、運転手にその旨を聞くと不要とのことでした。)

9月4日(日) 9:00

この日は中間総会がIFCM本部で開かれました。議題のうち4つは事前に会員によるオンライン投票が行われていました



総会 Irvinne Redor, IFCM

(いずれも賛成多数で承認)。今後もオンラインと総会出席者によるハイブリッド型の投票が行われるようです。総会のあとは出席者の皆さんと昼食会でした。

21:00

ヨーロッパの夜のコンサート開始時間はとても遅いのですよね。世界合唱博覧会のオープニング・ガラコンサートがベレン文化センターで開かれました。登場したのはシュツットガルト室内合唱団(指揮：フリーダー・ベルニウス)。この合唱団の演奏を聞いた



Kammerchor Stuttgart / Irvinne Redor, IFCM

のは2014年のソウルで開かれた世界合唱シンポジウム以来でした。メンバーの大半が入り替わったということもあったのか、ちょっと印象は違いましたが、ベルニウス氏の指揮に見とれてしまいました。ほとんど打点が無く、流れるような指揮で合唱団を

リードしていました。それなのに...あまりにも心地良くて、時差ぼけのせいもあったのか、途中から急激な睡魔に襲われてしまい...ああ、残念。

9月5日(月) 9:00

リスボン到着4日目にして、ようやくフリーな日。この日はワークショップ会場「ノッサ・セニョーラ・ド・カボ音楽学校」へ。午前中は「ポルトガルの伝統を歌う」(講師：カンテ・アレンテージョ=ポルトガルの男声ヴォーカルアンサンブル=)、「東南アジアの合唱作品におけるガムランとクリンタン音楽の影響」(講師：ユー・ハンタン=マレーシア/米国=)、「微分音による歌唱の宝石」(講師：ブラク・エルテム=トルコ=)という3つの講座を、午後はフリーダー・ベルニウス氏の指揮マスタークラスを聴講しました。この指揮マスタークラス、モデル合唱団がシュツットガルト室内合唱団でした。なんと贅沢なことでしょう！

21:00



MAZE / Suzanne van Arragon

この日のガラコンサートに登場したのがオランダから来たジャズコーラスのMAZE。ジャズコーラスグループと言えば5~6人で歌うスウェーデンの「リアルグループ」やフィンランドの「ラヤトン」が有名ですが、MAZEは19名の混声合唱団でした。創団してまだ5年とのことでしたが、そのプロフェッショナルな演出を含む歌唱力は秀逸でした。何よりも9度・11度・13度のテンションの響きが心地よく、リリリリズムで会場全体を熱くしてくれました。

続いたのがポートランド州室内合唱団。スピリチュアルを含む米国の合唱作品を披露してくれました。特に印象に残ったのが第4回IFCM作曲コンクールで3位に入賞した作品、デイビッド・ワルターズ『ラマで声が聞こえる』(David Walters: A Voice



Portland State Chamber Choir / Irvinne Redor,IFCM

is Heard in Ramah)でした。この作品は銃社会の米国の悲惨さを音で表現したものとのことで、胸に迫るものがありました。あとで調べてみたら、テキストは聖書エレミヤ書31章15節にあり、「母ラケルは亡くなった息子たちのために嘆き悲しみ泣く」という内容でした。

9月6日(火) 9:15 帰国

もう帰国する日になりました。このときもタクシーで空港まで行きました。もちろん、Uber Taxiを使って。

ところで、今回の旅行を決断しなければならぬときに、日本に帰国するためには、その72時間前にPCR検査を受けて陰性証明書を現地でもらわなくてははいけませんでした。当時のニュースでも報道されていたように、陽性で帰国できない人たちがいたり、数万円の高い検査料を払って帰国する人たちがいました。ですが、幸運にも日本の水際対策が緩和され、ちょうど帰国する日の、9月7日午前0時から、ワクチンを3回受けていれば、陰性証明書が不要となったのです。なので、とてもスムーズに(簡単すぎるほど)、以前と変わらない手続きで帰国することができました。ご参考までに、ポルトガルへの入国はワクチン接種証明書も陰性証明書も不要でしたし、乗り継ぎ空港での接種証明書の提示や検査は何もありませんでした。

次は来年4月の「世界合唱シンポジウム in イスタンブール」

IFCMの次のイベントは待ちに待った「世界合唱シンポジウム」で、2023年4月25~30日にイスタンブール(トルコ共和国)で開催されます。

世界合唱シンポジウムは、世界でも特に優れた合唱団と合唱指揮者・作曲家が集まり、コンサート、ワークショップ/セミナー、展示会などを開き、それらを通して、合唱音楽の芸術性の向上、協力、交流の促進を目的とする国際イベントです。

2023年のテーマは「地平線の変化(Changing Horizons)」で、世界中の歌の伝統を紹介すること。世界各国・地域の多様な歌唱スタイルや伝統に根ざした、社会的にも、民族的にも、地理的にも、文化的にも、異なる合唱がコンサートやワークショップ/セミナーで実践的に紹介されることでしょう。

海外の扉はすでに開かれています。ぜひ、「世界合唱シンポジウム in イスタンブール」にふるってご参加ください。ちなみにIFCM会員になると参加料が割引になります。詳しくは公式ホームページ(<https://www.wscmistanbul2023.com/>)をごらんください。また、全日本合唱連盟(<https://jcanet.or.jp/>)にも最新情報が掲載されるはずですよ。

【江川善裕 Profile】

山形県米沢市出身。武蔵野音楽大学卒。米国・ノースウエスタン大学大学院修士課程修了。フリーのサクソ奏者・講師を経て、全日本吹奏楽連盟事務局主事、全日本合唱連盟事務局次長を歴任。現在、国際合唱連合理事、日本サクソフーン協会会員、サクソフーン四重奏団 J-SAXER QUARTET 主宰。鷲宮ウインドアンサンブル創設指揮者。熊谷吹奏楽団副音楽監督。PRO WiND 023 メンバー。

